



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第6主日B年(2021年2月14日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 3章16－19節

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙1 10章31－11章1節

福音朗読：マルコによる福音書 1章40－45節

今日のテーマ：苦し^{くる}みと苦し^{きよ}みからの清め

三つの朗読から

第一朗読に「男を求め、彼はお前を支配する」(16節)とあります。もともと、男と女^{かんけい}の関係は平等、イコールでした。互いによく分^{わか}り、互いにわかちあ^あっていました。しかし、罪^{つみ}の結果、この関係は破綻^{はたん}してしまいます。支配と従属^{じゅうぞく}の関係です。

罪の結果、土地^{のち}は呪^{のろ}われてしまいます。労働^{ろうどう}も苦しみに変わってしまいます。罪は人と人との関係、人と他の被造物^{ひぞうぶつ}との関係、そして人と神との関係を破綻させてしまうのです。

第二朗読の「わたしがキリストに倣^{なら}う者^{もの}であるように」(1節)。パウロはキリストとの関わり、関係を生^いきます。それは「倣^{なら}う者^{もの}」という生き方です。「主イエス・キリストがそうであったように、わたしもまた…」。これが、パウロの生きる基準^{きじゆん}であり、こうして、キリストのように神の栄光^{えいこう}を現^{あらわ}す者となっていくのです。

福音朗読の「清くなれ」(41節)は短いですが、力^{ちから}ある言葉です。イエスの言葉は、単^{たん}にいやしの言葉ではありません。その人が神との関係を回復^{かいふく}していくための言葉です。そのためにイエスはあえてその人に触^ふれて、まず関係を回復していきます。

説教

人は苦しみを担^{にな}います。できれば担^{にな}いたくありませんが、しかし、人生のありとあらゆる場面で苦しみを担^{にな}って生^いきます。苦しみのない人生はありません。他人目^{ひとめ}には幸^{しあわ}せに見えていても、どん

な人でも誰にも言えない苦しみを担います。出生のこと、家族のこと、人間関係のこと、病気のこと、苦しみの種類は数えきれません。

ちょうど、今年で東日本大震災から10年となります。この10年間、被災地の方々は苦しみを背負ってきました。いえ、日本人全体が苦しみを担って生きてきたように思えてなりません。その直面する苦しみがないかのように振る舞う為政者たちの言葉に、不信感を抱きます。復興の名のもとに開催されようとするオリンピックの空虚さにため息がでます。そして、COVID-19によってさらに苦しみを担わされたわたしたちは、どこにその解決を求めたらよいのでしょうか。

今日の第一朗読はなぜ苦しみが生まれたのかという根本的な問いかけへの聖書の答えです。食べてはならないと神からいらわれていた木の実を食べてしまった人祖に与えられた苦しみは、はらみの苦しみであり、労働の苦しみでありでした。しかし、平等であった人間の関係は支配と服従の関係へと変えられてしまい、土地が呪われたおかげで他の被造物との関係も変わってしまったのです。つまり、人間の苦しみの根源に他の被造物との関係の破綻、神との関わりの破綻があるのです。

福音の中にも関係、関わりが途切れてしまった人物が登場します。「重い皮膚病」とは、イスラエルの共同体を壊しかねない病気、現代の言葉でいえば感染症です。共同体の中に「重い皮膚病」にかかった人がひとたび生まれると、人々はその人を排斥しました。病気の感染拡大を避けるためです。その人は共同体との関わりを断ち切られてしまいます。それどころか、律法によれば「重い皮膚病」は罪の結果でしたから、その人は神との関わりも断ち切られてしまいます。

誰とも関われない、誰からも関わってもらえない、これほどの苦しみはあるのでしょうか。そんな人に、イエスさまは「手を差し伸べてその人に触れ」ます。関わりの回復です。

自分の患部を祭司に見せて、病気が治ったことを証明し、認められることを「清め」と呼びました。それは共同体との交わりの回復なのです。しかし、今日の福音朗読に登場する「重い皮膚病を患った」人は、この出来事を人々に伝え始めます。自分が属している共同体の交わりだけではない、新しい交わり、関わりの中に生き始めたことに気がついたのでしょうか。病気の苦しみが取り去られるのはうれしかったでしょうが、新しい交わり、関わりの中で生き始めていくことの方がもっとうれしい体験だったのだと思います。